

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月17日現在

機関番号：57102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：平成22年度～平成24年度

課題番号：22360257

研究課題名（和文）沖縄の固有文化が持つ環境観と空間形成技術から見る集住環境の構成原理に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the constituting principle of Villages environment seen from the environmental view and space formation technology of Okinawa

研究代表者

鎌田 誠史（KAMATA SEISHI）

有明工業高等専門学校・建築学科・准教授

研究者番号：70512557

研究成果の概要（和文）：本研究では、土地の記憶（現地調査）、人の記憶（聞き取り調査）、歴史の記憶（文献調査）から伝統的集住環境の構成復元を試みて、長い歴史の中で、沖縄の人々がどのような空間を形成してきたのか、その集落形成の持続と変容のプロセスを考究した。その際、「立地特性（場所）」「エコロジカルな仕組み（営み）」「空間構成（かたち）」の3つのテーマに着眼し、沖縄（本島及びその周辺島嶼、宮古・八重山地方）の環境・文化・生活の多様性と獨創性を比較しながら、沖縄の文化にみる環境観と空間形成技術を考究し、集住環境の構成原理として考究した。

研究成果の概要（英文）：In this research, composition restoration of traditional collection living environment was tried from memory (field survey) of land, memory (listening comprehension investigation) of people, and historical memory (literature documentation), and investigation of continuation of the colony formation and the process of a change was carried out for what kind of space people of Okinawa have formed in long history.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2011年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2012年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	6,800,000	2,040,000	8,840,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学 都市計画・建築計画

キーワード：景観 沖縄 集落空間 伝統的集住環境の構成復元

1. 研究開始当初の背景

沖縄はかつて琉球王国として広大な海域を有した地域であり、有人島約50の島々は言語・文化面で同質性を保ちながらも、それぞれ独特の文化を継承しながら自然と共存した集落を形成してきた。しかし、残念ながら第二次大戦による戦災やその後の米軍統

治下による基地建設、近年の急速な開発を経験し、長い歴史をもって形成されてきた地域固有の集落空間が消滅の危機に瀕している。戦後60年以上が経過した現在の沖縄において、この失われた記憶を取り戻すべく地名や集落の景観復元調査を進める市町村や自治体が見受けられるようになった。戦前を知る

人々の記憶をかるうじて辿ることができる今、失われた記憶を取り戻す作業が緊急課題と考えた。

本研究メンバーは、これまで中国・台湾・韓国・沖縄など、東アジアの集落・居住空間について比較研究を進めてきた。その中で、現在失われつつある沖縄の集住環境について、その固有の文化を背景に形成された環境観や集落空間の重要性を認識するに至った。

研究を通じて、独自の文化を形成・継承してきた歴史的蓄積を整理・統合化し、固有の文化にみる環境観と空間形成技術を考究することが重要な課題であると考えに至った。また、戦災を経験した沖縄において、失われつつある集住環境の遺伝子を読み取ることが緊急課題であり、将来の地域再生や固有文化を生かした空間形成の根拠として重要であると考えられる。しかしながら、このような手法で集落の空間分析を行った研究蓄積は十分とは言えない。

これらを踏まえて本研究では、一般的に先島諸島に限定されてきた集落空間研究を、沖縄本島やその周辺島嶼へと拡大し、現在までの研究蓄積を基に、沖縄の文化にみる集落の空間構成とエコロジカルな集落環境の仕組みを明らかにし、環境と文化の価値を再評価しようとした。

2. 研究の目的

本研究では、土地の記憶（現地調査）、人の記憶（聞き取り調査）、歴史の記憶（文献調査）から伝統的集住環境の構成復元を試みて、長い歴史の中で、沖縄の人々がどのような空間を形成してきたのか、その集落形成の持続と変容のプロセスを考究する。その際、「立地特性（場所）」「エコロジカルな仕組み（営み）」「空間構成（かたち）」の3つのテーマに着眼し、沖縄（本島及びその周辺島嶼、宮古・八重山地方）の環境・文化・生活の多様性と独創性を比較しながら、沖縄の文化にみる環境観と空間形成技術を考究し、集住環境の構成原理として明らかにする。

これらの成果を手がかりに、沖縄の固有価値を生かしたエコロジカルな環境観の再生・活用を目指し、失われつつある沖縄の歴史的景観に配慮した景観形成への方途を提言することを究極の目的とする。

なお、伝統的集住環境の構成復元とは、①土地の記憶（現地調査）、②人の記憶（戦前の状況を知る古老への聞き取り調査）、歴史の記憶（古地図・一筆地調査図、米軍撮影空中写真・地図）を重ね合わせ、戦前における集落の地形、集落を構成している空間構成要素の空間的配置構成の復元を指す。失われつつある伝統的な集住環境の可視的な特徴を明確に把握することを目的としている。

第一に、沖縄がいかに地域固有性のある集

落空間を形成し、どのような環境観を育んできたのかを解明するため、伝統的集住環境の構成復元を取り入れ、かつ複合的な専門領域からの研究アプローチとして独創性があるといえる。導き出された成果は研究対象地への理解と還元に残らず、急速に失われつつある沖縄の固有価値を生かした居住環境構築の実践に還元できるものと位置付ける。

3. 研究の方法

沖縄（本島及びその周辺島嶼、宮古・八重山地方）の失われつつある伝統的集落にみる、「1. 立地特性」、「2. エコロジカルな仕組み（営み）」、「3. 空間構成（かたち）」に主眼を置き、伝統的集住環境の構成復元を通じて、その空間構成原理を明らかにする。本研究では、沖縄での現地調査・聞き取り調査・文献調査を通じて研究課題を進めていく。その際、①沖縄本島エリア、②島嶼エリア（本島周辺）、③離島エリア（宮古・八重山地方）の3地域に分け、それぞれの地域を対象に研究を行う。現地調査・聞き取り調査では、それと並行して地名や集落の景観復元調査を進める地元の市町村や自治体との連携を図り、本研究における伝統的集落空間の構成復元のための情報収集や研究成果の共有化を目指す。文献調査では、現在まで進めてきた研究代表者・分担者の蓄積の整理・統合に加え、特に戦前の地籍資料の収集を行う。

研究代表者や分担者が現在まで蓄積してきた沖縄の研究・調査資料をもとに、調査対象地の選定を行い、伝統的集住環境の復元を通じて、沖縄の集落空間構成原理を明らかにする。現在まで収集してきた史料をもとに、研究分担者・研究協力者とともに現在の地形図・空中写真と比較しながら調査対象地の選定を行う。調査対象地の選定においては、かつて伝統的に維持・管理されてきた人工林「抱護（林）」または「屋敷林」を所有していた集落を中心に行う。これは研究代表者・分担者が行ってきた集落研究の経験により、「抱護（林）」「屋敷林」に伝統的な地理思想が表出しやすいことと、沖縄における集落立地特性とエコロジカルな環境観を把握することが可能と考えられるからである。よって、このような集落を対象に、集住環境の構成復元を通じて、自然の仕組みに沿ったエコロジカルな空間形成技術を明らかにする。また、沖縄県立公文書館・図書館、各市町村への資料収集を行い、現地の研究分担者・協力者とともに研究を進めていく。

4. 研究成果

沖縄（本島及びその周辺島嶼、宮古・八重山地方）の失われつつある伝統的集落にみる、「1. 立地特性」、「2. エコロジカルな仕組み（営み）」、「3. 空間構成（かたち）」に主

眼を置き、伝統的集住環境の構成復元を通じて、その空間構成の特徴を明らかにした。

1) 八重山地方

石垣市教育委員会教育部市史編集課の協力により、平得村・真栄里村、大濱村、宮良村、白保村の1899(明治32)年から5年間にわたる「土地調査事業」によって作成された地籍図(以下、明治期地籍図)を入手することができた。当地籍図は八重山古地図に示されていない精度の高い道路線形や地割形態など明治期の様相を記録したのものとして、きわめて貴重な資料である。この明治期地籍図をベースに「八重山古地図」や先行研究の研究成果を用いて本研究では、沖縄県石垣市の平得村・真栄里村、大濱村、宮良村、白保村の村落空間の復元図を作成し、往事の村落空間の特徴を考察した。

平得村・真栄里村、大濱村、宮良村、白保村の集落には村番所と製糖小屋が隣接し、鍛冶屋が村落の外縁部に配置するという共通性が認められた。また対象村落に共通して村落外縁部には樹林帯(村抱護)が分布し、その外側に墓地が分布していることから村抱護に囲まれた範囲が村域を示している可能性を指摘した。このような抱護は、海岸沿いに分布する浜抱護と村域を取り囲む村抱護が存在し、特に村抱護には帯状で幅の小さな形状の樹林帯が多く見られた。加えてこのような村抱護と聖域が結合(平得村、大濱村、宮良村、白保村)し、居住域とその周りの生産域を抱き囲むように分布するという共通した特徴を指摘した。本研究の復元図によって、抱護の詳細な形状が明らかとなった。

また、対象村落において、村抱護で囲まれた範囲に居住域と生産域、聖域の大きく3つの要素が配置される点でも共通していた。居住域の形状は井然型(ゴバン型)であるが、その道路構成に直線的または湾曲した構成の大きく2種類に分類され、1771年の明和の大津波による村落の成立年代の違いが形態的な相違に関係している可能性を指摘した。

このように明治期の村落空間の特徴を明らかにした上で、明治期から現在の村落空間の変遷を考察した。まず、対象村落に共通して明治期から昭和20年頃までは、道路線形や地割構成に加えて居住域、生産域、聖域の面的要素の配置構成、敷地の分筆も大きな変化が見られなかった。つまり、対象村落に共通して明治期の空間構成が昭和20年頃まで維持されていたことが明らかとなった。ただし、数カ所から十数カ所の畑地が宅地に変化している点や、村落西側の村抱護に一部消滅が見られた点で共通して変化していた。

村番所は昭和20年ごろまでは集会施設となっている例も見られたが、現在は公民館の

平得・真栄里の両村を除き他用途へ大きく変容していた。加えて、製糖小屋や鍛冶屋についても宅地、畑地、道路、林など様々な用途に変容しており、共通性は見られなかった。また昭和20年頃から主に畑地を合筆して学校用地や商業用地に変容している例が確認された。

昭和50~56年では道路線形や幅員および地割形態は維持されていたものの、主に都市化による居住域の拡大や地筆の分筆、学校用地の確保による生産域の減少が顕著であった。現在においてはさらなる都市化の進行によって特に村抱護で囲まれた村域において生産域の消滅が顕著で、村落空間に大きな変化を遂げていたことが明らかとなった。ただし、道路線形と地割形態は幹線道路の新設による変化は見られたものの、特に居住域内においては明治から現在に至るまで、骨格としては維持されていたことが明らかとなった。

一方で村抱護(保安林)は、昭和20年ではすでに一部消滅が確認され、共通して村落西側において早い段階から消滅が進んでいたことが明らかとなった。現在では一部は道路となって現在にもその痕跡を示している箇所が確認できる程度であり、景観的には完全に消滅している。ただし、地籍併合図にて現在でも明治期の形態をたどることが可能であることを明らかにした。先に述べた通り、旧来、聖域と結合した村抱護が村落を取り囲んで特徴的な景観を形成していたと考えられるが、村抱護がすべて失われて聖域だけが残った姿が現在の村落景観である。なお、浜抱護の分布する村落では広葉樹林帯として現在も比較的残存していることが明らかとなった。

聖域(御嶽・拜所)については、多少の規模の変化や公民館の併設が見られたが配置においては、対象村落すべてに年代を超えて大きな変化が見られなかった。戦後から近年の都市化によって居住域が拡大し、生産域が減少または消滅して村落構成に変化が見られた一方で聖域はすべての村落に共通してほぼ変化していないことが明らかとなった。

2) 宮古地方

那覇地方法務局宮古島支局の協力により仲筋村と塩川村の明治期地籍図を入手することができた。

これまで、宮古郡多良間村のかつての集落構造や「抱護」林の変化についての資料は、土地整理事業(以下「事業」:明治32~35年)時の地籍図(ただし、「地目」まで記載されているのは一部の字のみ)、および1945年3月撮影の米軍写真に頼るほかなかった。今回、那覇地方法務局宮古島支局の職員の皆様のご好意で、多良間島中心集落の一带について、土地台帳の撮影許可を受けることができた。

これにより 2011 年 3 月 7～9 日にかけて、一部の欠落（現・夢パティオたらま東側）を除き、同一帯のほぼ全ての土地台帳を撮影・記録することができた。

土地台帳を確認することにより、台帳の閉鎖時期と思われる 1965 年末までの地筆ごとの地目転換、土地所有者の変化を年月日単位で把握することができた。これらの情報自体の解析と、その情報を「事業」時の地籍図（多良間村役場所蔵）画像をもとに復原した多良間島の中心集落の地籍図におとしていくことで、同集落の「事業」以降の変化を分析した。

土地台帳に記載された当初地目を地籍図におとすことにより、「事業」当時の多良間島中心集落一帯の土地利用状況を分析した。現在の同集落と比較すると、まず宅地について、西側の仲筋地区と東側の塩川地区とで、それぞれ異なる違いを確認することができた。仲筋地区では、現在では畑あるいは空き地となっているところが「事業」時は「宅地」であった地筆が目立つ一方で塩川地区では、現在宅地となっているところが「事業」時は「畑」であった地筆が広大に広がっている。以上のことから、とくに東側の塩川地区において、「事業」後今日までに急激な宅地化が進んだことを確認することができた。ほかに、集落内部に小面積の「拝所」地筆、仲筋地区北側の丘陵地に広大な「拝所」地筆が点在していた。

多良間島といえば集落南側に現存する「抱護」林が知られているが、「事業」当時は、この集落南側の現在の「抱護」林とその脇の道路部分までを含めて「山林」となっていた。また、「事業」当時は集落東側にも細長い「山林」地筆が連続し、さらにはその延長線上にある集落北側にも「山林」地筆が連続していたことを確認することができる。なお、海岸沿いには別に「原野」地筆が広がっているが、集落を取り囲むように連続した地筆のみが「山林」地筆となっていることが特筆される。土地所有についてみると、これら「拝所」「山林」地筆のほか「原野」地筆の多くは、旧仲筋村・塩川村の所有地「村有地」となっていた。なお、「宅地」「畑」と一部の「山林」地筆についてはほぼ、集落内居住の個人所有地によって占められているが、土地台帳記載のデータベース化を通じた相互参照により、土地所有者の氏名だけでなく住所についてもほぼ特定することができた。その結果、仲筋村の住民はもちろんのこと、塩川村の住民も少なからず仲筋村側となる丘陵地の畑を確保しているといった、興味深い土地所有関係も確認することができた。

土地台帳の記載をもとに、「事業」以降の一帯における地目の転換、および地筆の分割を確認した。地目の転換は、一般的な農村集

落と比べて多くはない。そして、西側の仲筋地区では「宅地」から「畑」に転換された地筆が、東側の塩川地区では「畑」から「宅地」に転換された地筆が目立つ。転換の時期については、仲筋地区では明治末から昭和の初期にかけて、塩川地区については 1950～60 年代にかけて多くみられた。分筆は、明確に東側の塩川地区に偏っていた。そして分筆時期については、「宅地」地筆の分筆は大正年間から継続して、「畑」地筆の分割は 1950～60 年代に集中してみられ、とくに後者は、多くが分筆後に「宅地」への転換を伴っていた。こうした変化の中で唯一、集落の東側の「抱護」林に関わる変化が塩川字西原（453 番地）において確認できた。同地筆は「山林」地筆であったものが 1964 年に分筆され、そのうち枝番 2 の地筆がまもなく「宅地」に転換された。同地筆の周囲ではほかにも同年代に、「畑」地筆の「宅地」への転換が相次いでいた。

以上より、多良間島の中心集落は「事業」以降、継続して西側の仲筋地区の「宅地」が「畑」などに転換され、一方で東側の塩川地区においては「宅地」が拡大する形で、集落全体が東進してきたことが明らかとなった。このうち、仲筋地区の「宅地」の転換は「事業」からあまり時間が経過せずに行進しており、「事業」前後にすでに同地区において放棄された「宅地」が少なからずみられていた可能性を指摘できる。一方で塩川地区では、「宅地」群と、集落を囲む「抱護」林との間にかつては「畑」地筆が広がっていたが、それらの地筆は時期的には少し時間をおき、1950～60 年代に分筆を経て地目転換される形で宅地化された。

また、多良間島中心集落を取り囲む「抱護」林については、現在も樹列を残す集落南側の「山林」地筆に加えて、集落の東側にもかつては「山林」地筆が細長く伸びていたが、後者は段階的に消滅していった。このうち、集落南側の「山林」地筆は、後にその北側あるいは南側を一部道路の敷地などに譲りつつも、ある程度の幅をもって明確な樹列を残し、後に天然記念物となる「抱護」林を今日まで残すことになる。とくに、集落を仲筋地区と塩川地区とに分ける境界がこの南側では大きく東側にふれることもあり、これら集落南側の「山林」地筆はほぼ仲筋地区にかかっているが、同地区において宅地の拡大があまりみられなかった（むしろ放棄が進んだ）ことで、宅地化の波をあまり被らなかったのかもしれない。

一方で、集落東側の「山林」地筆については塩川地区にかかっており、同地区の「宅地」拡大が進んでいたこともあって、1960 年代までに宅地化に飲み込まれる形で地籍としても一部消滅した。ただしその時期について

は、台帳閉鎖時の駆け込み登記の可能性もあり、断定できない。集落北側の「山林」も、「抱護」林の延長と認識されていた可能性がある。

なお、その他宮古市市史編纂室の協力により、池間村の明治期地籍図を入手することができた。

3) 沖縄本島及びその周辺島嶼

沖縄県立図書館の協力により旧勝連間切りの南風原村、平敷屋村、内間村、平安名村、浜村、比嘉村、津堅村の明治期地籍図を入手することができた。

これらの村落の村落空間の復元図を作成し、往事の村落空間の特徴を考察した。その中で特に南風原村は近世村落の特徴を有した顕著な例であることがわかった。

南風原村の集落には村番所が分布し、村獅子が居住域の外縁部四隅に配置するという特徴を有していた。居住域が明確に示された顕著な例といえる。集落を囲うように4つの石獅子があるということで、この点を結ぶことによって、村域が想定され、そのエリアを想定することが、実は周りを囲うという機能を持たせていたと想定される。本研究の復元図によって、往時の詳細な形状が明らかとなった。

居住域の形状は井然型（ゴバン型）で、4戸が1つの単位を形成した地割構成が基本となっていることが明らかになった。居住域背後には腰当森が立地しているが、そこには近世村落の特徴である通し御嶽が見られない。これは、元集落である勝連城跡に容易に行き来できるため、御嶽を設ける必要がなかったと想定される。村落の立地特性を見ると、腰当森を背後に居住域が形成され、その四隅に村獅子を置くことで村を抱護する、つまり風水思想が近世村落の形成に影響していると考えられる。

また、居住域内には計画的に水路が設けられており、現在でもそのほとんどが残存していることが分かった。

4) 研究成果の発表

研究成果を地元コミュニティ・市町村・沖縄研究者へ還元することを目的に、学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落—固有文化にみる沖縄の環境観と空間形成技術」〈日時〉平成24年10月6日（土）〈会場〉沖縄県立博物館・美術館（博物館講座室）〈定員〉120名を開催した。

高良倉良（琉球大学教授・研究協力者）が、「琉球の歴史と村落」を発表し、歴史学の観点から琉球の村落に関わる制度上の特徴など概説した。鎌田誠史は、「琉球の村落空間の復元と空間構成」を発表し、沖縄に残存する明治期の地籍資料から村落空間の

復元図を作成する手法や復元図から読み取れる往時の空間構成の特徴を発表した。山元貴継は、「沖縄の村落・都市に残る『抱護』林のこん跡」を発表し、明治期の地籍図資料・土地台帳・一筆調査資料等のデータ整理から石垣市街地の消滅した抱護林の復元図及び地籍図変化による消滅過程を実証した。鈴木一馨（公益法人中村元東方研究所研究員・駒澤大学非常勤講師・研究協力者）は、「抱護と村獅子にみる沖縄の集落風水の変化」を発表し、村獅子が集落居住域の外縁部四隅に配置するという特徴を挙げ、この点を結ぶことによって、村域が想定され、周りを囲う（抱護）という機能を持たせていたと指摘した。仲間勇榮（琉球大学教授・研究協力者）は、「抱護の受容文化とその植生構造の特徴」を発表し、沖縄のフクギの屋敷林を含めた集落景観が風水思想に基づいて計画的にある時期につくられたと仮説を立て、その思想の基層には抱く（抱護）世界観が村落形態に影響を及ぼしていると発表した。澁谷鎮明は、「韓国の『裨補』と沖縄の『抱護』」を発表し、村抱護と韓国・「村の林」の形態的比較や機能的比較について述べた。齊木崇人は、シンポジウムの総括として沖縄研究からひろくアジア全体への研究につなげる可能性を示唆した。

以上より、東アジア全域における環境観や風水思想の環境的影響や集落景観構成の比較研究において、復元的視座に立った集住環境の構成原理に関する研究を国際的に高める必要がある確信した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

- ①大川泰毅、鎌田誠史、沖縄県今帰仁村今泊における集落空間の特徴と変遷—集落空間の復元を通じて—、日本建築学会九州支部研究報告 No52、pp205-208、査読無、2013
- ②鎌田誠史、浦山隆一、齊木崇人、石垣島平得村・真栄里村における村落空間の特徴と変遷—明治期の資料を活用した村落の空間構成の復元を通じて—、日本建築学会計画系論文集 No679、pp73-79、査読有、2012
- ③浦山隆一・澁谷鎮明、沖縄の近世集落形成に関わる「抱護」林について、『東アジア地域の歴史文化と現代社会』pp63~77、査読無、2012
- ④鎌田誠史・浦山隆一、石垣島平得村・真栄里村における村落空間の特徴と変遷—明治期の資料を活用した村落の空間構成の復元を通じて—、日本建築学会九州支部研究報告、51号、pp197~200、査読無、2012
- ⑤任亜鵬、齊木崇人、中国西南地方の苗族、

土家族の集落空間、芸術工学会誌 58 号、pp35-42、査読有、2012

- ⑥浦山隆一、学際シンポジウム「風水思想と東アジア」講演記録「沖縄の近世集落形成に係わる「抱護」林への総合的アプローチ」、雑誌『アリーナ』第 14 号「特集:民俗知としての風水」、pp39-49、査読無、2012
- ⑦澁谷鎮明、韓国風水の形局論的側面—「気」は「かたち」に表れる、雑誌『アリーナ』第 14 号「特集:民俗知としての風水」、pp175-188、査読無、2012
- ⑧山元貴継、沖縄県における地籍図・土地台帳とその活用、雑誌『アリーナ』第 14 号「特集:民俗知としての風水」、pp189-200、査読無、2012
- ⑨鈴木一馨、古代・中世日本の四神相応、雑誌『アリーナ』第 14 号「特集:民俗知としての風水」、pp108-119、査読無、2012
- ⑩鈴木一馨、沖縄本島における抱護と村獅子の分布について、歴史地理学第 54 巻第 4 号、pp60-61、査読無、2012
- ⑪鈴木一馨、沖縄の抱護について、歴史地理学、256、69-70、査読無、2011
- ⑫鈴木一馨、風水の圍繞空間形成と沖縄の抱護、宗教研究、367、421-422、査読無、2011

[学会発表] (計 14 件)

- ①大川泰毅、鎌田誠史、沖縄県今帰仁村今泊における集落空間の特徴と変遷-集落空間の復元を通じて-、日本建築学会九州支部研究報告、2013. 3. 3、大分大学
- ②鎌田誠史、琉球の村落空間の復元と空間構成、学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、2012. 10. 6、沖縄県立美術館博物館
- ③澁谷鎮明、韓国の「裨補」と沖縄の「抱護」、学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、2012. 10. 6、沖縄県立美術館博物館
- ④山元貴継、沖縄の村落・都市に残る「抱護」林のこん跡、学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、2012. 10. 6、沖縄県立美術館博物館
- ⑤鈴木一馨、抱護と村獅子にみる沖縄の集落風水の変化、学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、2012. 10. 6、沖縄県立美術館博物館
- ⑥鈴木一馨、琉球風水の装置としての村獅子について、日本宗教学会第 71 回学術大会、2012. 9. 9、皇學館大学
- ⑦鈴木一馨、沖縄本島における抱護と村獅子の分布について、歴史地理学会第 55 回大会、2012. 5. 10、新潟大学
- ⑧鎌田誠史、浦山隆一、石垣島平得村・真栄里村における村落空間の特徴と変遷-明治期の資料を活用した村落の空間構成の復元を通じて-、第 51 回日本建築学会九州支部研究発表会、2012. 3. 4、西日本工業

大学 小倉キャンパス

- ⑨浦山隆一、東アジアの風水思想が近世琉球王朝の国づくりに与えた影響、第 2 回黒竜江流域文明鶴崗論壇、2011. 7. 14 中国・黒竜江省鶴崗市
- ⑩浦山隆一、沖縄の近世集落形成に係わる「抱護」林への総合的アプローチ、学際シンポジウム「風水思想と東アジア」2011. 10. 8 中部大学リサーチセンター
- ⑪澁谷鎮明、韓国の裨補風水—「環境」をどう「補強」するのか—、学際シンポジウム「風水思想と東アジア」2011. 10. 8 中部大学リサーチセンター
- ⑫山元貴継、沖縄の「抱護」林と近・現代、学際シンポジウム「風水思想と東アジア」2011. 10. 8 中部大学リサーチセンター
- ⑬澁谷鎮明、「Hougo」 Concept and Tree Plantation in Feng shui Research Diary in Pre-modern Okinawa, Yeongwol Yonsei Forum 2011. 5. Yeongwol, Korea
- ⑭山元貴継、近・現代における沖縄の集落と「抱護」林、第 6 回 東アジア沿海科学研究集会、2011. 2. 12 愛知県南知多町

[図書] (計 1 件)

- ①浦山隆一、澁谷鎮明、山元貴継、鈴木一馨、雑誌『アリーナ』第 14 号「特集:民俗知としての風水」、風媒社、2012

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鎌田 誠史 (KAMATA SEISHI)
有明工業高等専門学校・建築学科・准教授
研究者番号: 7 0 5 1 2 5 5 7

(2) 研究分担者

浦山 隆一 (URAYAMA TAKAKAZU)
富山国際大学・現代社会学部・教授
研究者番号: 1 0 4 6 0 3 3 8
澁谷 鎮明 (SIBUYA SIZUAKI)
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号: 6 0 2 5 2 7 4 8
山元 貴継 (YAMAMOTO TAKATUGU)
中部大学・人文学部・准教授
研究者番号: 9 0 3 8 7 6 3 9
齊木 崇人 (SAIKI TAKAHITO)
神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授
研究者番号: 9 0 1 9 5 9 6 7

(3) 連携研究者

鈴木 一馨 (SUZUKI IKKEI)
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号: 5 0 2 8 0 6 5 7